NPO 法人日本空手松涛連盟静岡県本部

静岡松涛タイムス　第 53 号

発行元：静岡県本部広報部　　責任者：滝田宏平
連絡先：0547-36-1238(TEL)　0547-36-1293(FAX)
E-mail：kouheichan@tiara.ocn.ne.jp
URL　http://www.shizuoka-karate.com/ (公式 HP)
http://www4.tokai.or.jp/sougou/　(広報部)

画像：零式艦上戦闘機(通称ゼロ戦)

■日本の歴史々上最大の分岐点「昭和」を語る■

本年 8 月 15 日、66 回目の終戦記念日を迎えました。毎年、終戦記念日を迎えるたびに思うことはあるのですが、戦争を知らない私にとっては、どこか遠い国の話のように感じていました。しかし今年は違います。なぜなら東日本大震災を知ってしまったからです。迫る炎、押し寄せる波、がれきの山になった街、地形が変わってしまった山や海、ひもじさや寒さ、無数の棺、行方不明者をいまだ待つ人、原子力発電所損壊による被爆、政府の対応、あっという間に、すべてが消えてしまったこと…。それでも生きていかなければいけないこと。敗戦を迎えて 66 年、こんなにも長い期間、戦争を放棄している国は日本くらいだそうです。その日本がまるで、敗戦の後のような憂き目にあっているのは運命の皮肉ではないのでしょうか。しかしここからまた始めて行きましょう。戦後の復興と同じく、奇跡の復興を心より信じてやみません。今回は、その厳しい戦時下・戦後において空手に取り組んで来られた、静岡県本部相談役・水上勇先生より、たいへん貴重な資料をお借りする事ができましたので、本誌面にて紹介させて頂きます。(広報部)

- -

昭和 17 年 4 月、大陸雄飛の大志を抱き、拓殖大学予科支那語科に入学後空手部に入部した。当時の学生のほとんどは私と同じ志しを以って入学した学生が多かった。新入生歓迎会をするという事で、校庭に行くと運動部の勧誘であった。私は迷わず空手部に入ることにした。早速、花小金井の拓空塾道場に行くと松林の中にある古びた建物で、下が道場で 2 階が学生寮であった。翌日の授業終了後より道場にて稽古が始まった。先ず巻き藁の突き方を教わる。私は兄が早稲田大学の空手部主将であった為、自宅に巻き藁棒を立てて突いていたので問題は無かった。翌日からの練習は先ず巻き藁突き 100 本が始まる。初めて突く者は拳が破れ血が出る者、腫れる者が多かった。その後次第に回数が増え、1000 本突きが毎日の日課となった。100 名程いた新人も、猛烈で過酷な稽古の連続で、部員が次第に減って遂に 10 数名になった。これが私の同期である。毎日の稽古は巻き藁突き 1000 本から始まり、蹴り 1000 本、次に受け技・突き技の移動基本に続き、型・組手の稽古が毎日 5 時間程行われた。稽古が終わると意識朦朧の状態で寮に帰る毎日、先輩の指導は絶対で、やらざるを得なかった。2 年が経過し、昭和 18 年になると、世界を相手にした「大東亜戦争(太平洋戦争)」も戦況厳しく、戦場に赴かざるを得なくなった。時の首相「東条英樹」の大号令で、東京大学を始め、全ての大学生が代々木の練兵場に集結し、出陣の決起大会が行われた。此れが学徒出陣の始まりだった。12 月になると私のところへ召集令状が届いた。指定された部隊は、磐田市の 129 部隊で、通信教育部隊であった。1 年間の幹部教育を経て、第 5 航空軍に配属が決まり、南支広東に移動する事となり、朝鮮を通り移動を開始したが、戦況厳しく、京城(現在のソウル)にて待機の指令があった。その後昭和 20 年 8 月 15 日、天皇より終戦の詔勅をラジオ放送で聞くが、日本が負けるなんて信じられなかった。此れから日本はどうなるのだろう、自分たちはどうなるのだろう、と不安の毎日が続いた。10 月になって復員の命令があり、釜山港より博多港に着き、静岡の自宅に帰る。1 ケ月程休養し 12 月に入り復学の手続きをし、大学に戻るが東京大空襲により東京は焦土化し、一面焼け野原であった。大学も本館以外はことごとく焼け跡だけだった。復学後に早速後輩に会い、東京在住の空手部員に連絡し、同期 3 名と後輩 2 名が集まった。私を加え此の 6 名で、戦後初めて空手部の再開ができ、ようやく稽古に入ることができた。

その後復学者が増え、部員も 15～6 名になり、写真のような校庭や本館屋上の稽古が始まった。終戦直後の東京の生活は、それは厳しく、住むところはおろか、食べ物も無い非常に深刻な環境下での稽古であった。また郊外稽古も、大塚警察柔剣道場や中野剣道場、池袋の幼稚園等を借りての稽古だった。ほとんどの家は焼かれ、この時代・状況下で写真機を持っている部員は珍しく、たいへん貴重な練習写真である。

現在の空手会員で巻き藁棒を突く者は少ない。巻き藁とはどんな物で、何の為に使う物か 2 つある。1 つ目は巻き藁棒、2 つ目は吊し巻き藁の 2 種類である。前者は主に正拳、手刀、裏拳、猿肘等の武器を鍛え、また蹴りを鍛える。吊し巻き藁は主に内腕、外腕、背腕等の鍛錬に使った。武器を作るだけで無く、正拳突きを正確に体得する為に突くのであり、腰の回転で下半身を絞め、目標に対して正確に突き切る事を目的に体得する手段であり空手道を学ぶ者にとっては欠かす事のできない稽古の１つである。我々拓殖大学空手部員は最も大切な稽古として空手の基本中の基本である、巻き藁突き 1000 本を毎日の常とし、365 日欠かさずに続けてきたのである。(資料提供及び本文：静岡県本部相談役 静岡東支部拓心館館長　水上 勇)

【写真の解説】

《上段左》此の写真は、本部道場焼け跡における空手部員による基本の突きの稽古である。

《上段中央》此の写真は、空襲で残った本館の屋上における、空手部員全員による基本稽古である。

《上段右》此の写真は、後輩の高橋・中島による巻き藁突き 1000 本を行っている写真である。《下段左》此の写真は、高橋・安倍・中島・島村・菊池・中山・林の後輩が、巻き藁突き 1000 本を終了し、全員で一息ついている写真である。《下段右》此の写真は、直接空手とは関係ないが、予科生全員が昭和 18 年に富士板妻兵舎にて宿泊軍事訓練を受けて、帰りに箱根の芦ノ湖畔で休憩中、同期全員で撮影した写真である。訓練は銃の取り扱いや実弾射撃の練習・歩伏前進等、実戦に則した訓練であった。今考えると、この頃から学徒出陣の時が近づいていたのだと思う。(写真解説：水上 勇)

●静岡市空手道協会名誉会長　●静岡市体育協会評議委員

●NPO 法人日本空手松涛連盟静岡県本部相談役　●静岡東支部拓心館指導責任者(館長)

…水上勇 師範　略歴…

〔昭和 17 年〕拓殖大学空手部に入部、松涛館流開祖 故船越義珍先生の指導を受け段位取得〔昭和 20 年〕帰還復学して大学に戻り拓殖大学空手部を再開する〔昭和 56 年〕社団法人日本空手協会静岡東支部にて指導に当たる傍ら、同協会の静岡県本部相談役に就任。静岡市空手道協会会長に就任、現在に至る〔昭和 62 年〕拓心館道場を創設、館長となり指導に当たる〔昭和 63 年〕静岡市体育協会体育功労賞受賞〔平成 5 年〕静岡市スポーツ同友会会長に就任(武道 7 団体)、以後静岡市武道館建設運動を推進〔平成 12 年〕NPO 法人日本空手松涛連盟師範の称号を取得。同年、全国空手道選手権大会・一般五部型試合 第三位〔平成 22 年〕第 12 回全国空手道選手権大会・一般六部型試合に於いて優勝を飾る。現在も生涯現役にこだわり選手活動を続ける。

※左上画像：第 12 回全国空手道選手権大会(愛媛県武道館)一般六部型試合にて明鏡を演武し優勝した水上勇師範